アメリカ文学に描かれた戦争

研究室のある生田3号館の窓辺にて

文学部英語英米文学科教授
渡邉真理子

わたなべ　まりこ

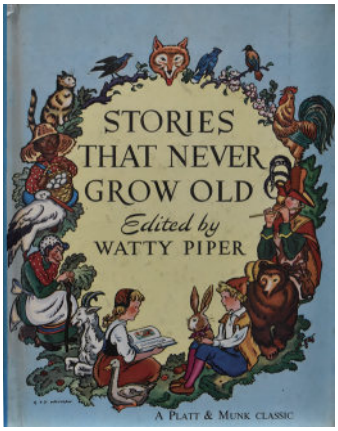
福岡女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了。福岡大学外国語専任講師、西九州大学准教授を経て、2021年に専修大学文学部英語英米文学科准教授、2022年より教授。共著に『アメリカ文学入門』（三修社、2013年）、『脱領域・脱構築・脱半球――二一世紀人文学のために』（小鳥遊書房、2021年）など。

始まりはM

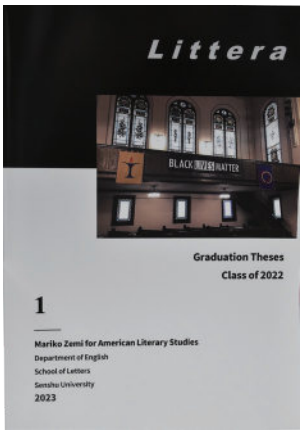
美しい装丁の一冊の本。Watty Piper編 *Stories That Never Grow Old* という童話集です。初版は1938年と古いものですが、売れ行きがよかったのか以降も長いあいだ増刷された本で、現在もアマゾン等で購入可能となっています。1970年代の終わり頃でしょうか、仕事でロサンゼルスに滞在していた叔父が帰国した際にお土産としてくれたこの一冊が、幼い私のアメリカとの出会いでした。アルファベットの形容しがたい美しさに一瞬で魅せられた私は、どうやらその「模写」を試みたようです。というのも、この童話集の一番目に収められた“The Ugly Duckling”（「みにくいアヒルの子」）の冒頭ページの最初の単語“Mother”――そこには卵を抱くアヒルの姿を描いた挿絵がついています――の上に、鉛筆書きの“M”の文字が残っているのです。私が生まれて初めて書いたアルファベット。それは偶然にも私のファーストネームの頭文字。今思えば、これが私のアメリカ文学への最初の一歩だったのかもしれません。Aから始まっていない点がひょっとしたら文学的なのかもしれませんが、“Mother”のMはやっぱり始まりにふさわしい文字だと感じています。それはものを生み出す母体としてのマトリック（Matrix）。ラテン語“Mater”を語源とするこの単語は16世紀には「子宮」の意味で使われていたのです。それはともかく、この一冊のおかげで私は「英語アレルギー」を患うこともなく、むしろ英語で書かれた書物を読みたいと思うようになりました。ただ、原書を読めるようになるためには長い時間と労力が必要です。中学校で正規教科としての「英語」の授業が始まっても、本が読めるようにはならない。高校、大学、大学院と読み続け、現在では現代小説であれば一通り読めるようにはなれたものの、やはり物語や小説を豊かに読む力と、一般的な英語学習は違います。おそらくこれからもずっと、始まりのMを求める旅は続くのかもしれません。

アメリカ文学に描かれた戦争

研究者としては、冷戦期以降に発表されたアメリカ小説に描かれた人間のサバイバル――戦争、災害、



←童話集
Stories That Never Grow Old



→ゼミ論集 *Littera*

テロリズムを経験する人間の生――の諸相を考察してきました。例えば、修士論文で取り上げたジョゼフ・ヘラーの『キャッチ 22』（1961 年）の主人公は、生き延びるために狂気を装って軍隊から離脱しようとするものの、「戦闘任務を逃れようとする者は本当の狂人ではない」という軍規 22 号の言葉の罠（キャッチ）で身動きできません。このような言葉の不条理は、現代社会にも認められるものではないでしょうか。私たちも無意識に「言葉」というものに囚われているのではないかと思わずにはいられません。戦争とは価値観の変化をもたらす大きな場であり、その変化はなによりも言葉に反映されます。第二次世界大戦後の日本の国民学校において、GHQ の指示により教科書に記述されていた戦意を高めるような言葉が子どもたちの手で「黒塗り」されたことはその分かりやすい例でしょう。

現在研究しているのはティム・オブライエンというベトナム戦争の帰還兵作家です。1946 年生まれの小説家で、現在でも執筆をつづけています。日本では彼の最新エッセイ集『戦争に行った父から、愛する息子たちへ』（作品社、2023 年）が上岡伸雄・野村幸輝訳で発表されたばかりです。村上春樹が翻訳したオブライエンの代表作『本当の戦争の話をしよう』（1990 年）のある場面では、国家にとって不名誉な「負けた戦争」から故郷へと帰還した若者が、話を聞いてくれる人がみつからず、ひとり車を走らせ町をぐるぐると回り続ける姿が描かれています。アメリカにおいて「負けた戦争」と扱われることの多かったベトナム戦争の帰還兵たちにとって、現地でのアメリカ軍による民間人虐殺の報道も相まって、戦地での経験を「語る」ことが一種のタブーとされた時期もありました。一方、これより 100 年ほど前に発表されたスティーブン・クレイン作『赤い武功章』（1895 年）の若き主人公は、自ら南北戦争の北軍に志願し、戦場から戻ったら故郷で女性たちを相手に勇敢な戦争体験を語って英雄になりたい、という夢を抱いて出兵します。20 世紀後半になると、戦争体験を武勇伝のように書いてはならないという姿勢を示すヘラーやカート・ヴォネガットといった作家が登場します。戦争小説において「どのように書くのか」は大きな問題です。例えば、戦死や殺戮をヒロイックに描いた小説を読んだ子どもたちに「戦争ってかっこいいなあ」と思わせてはならないのです。オブライエンはこのような態度を共有しつつ、徴兵を拒否する「勇気」がなく戦場へ行った「臆病」な自分を出発点にベトナムを書く作家です。行き場のない言葉を抱えた登場人物に光をあてた作品群は、文学的な戦争への向き合い方かもしれません。

文学を通して社会と生き方を学生と考える

教育においても小説の読解を通して学生の言葉に対する感性を磨いているところです。昨今の SNS 上の誹謗中傷や「炎上」は、文脈から切り離されてひとり歩きをする言葉の力に踊らされる人間の姿を炙り出しています。そのような言葉の戦争が頻発する現代社会をどのように眺め、どう生きるのか――文学研究が対象とする知のフィールドは、狭いようで実は広いのです。創刊号が出たばかりのゼミ論集 *Littera* には、一つの作品から世界について考えた学生の意欲的な批評論文が収められています。タイトルの“Littera”とは「文字」を意味するラテン語。言葉の海をわたる人生の水先案内として、研究と教育の両面から文学という学問の可能性を信じています。